



秋の葉

文風 冴月

晴れ

私は三角定規を使って林檎の絵を描いている。冷たい風が、遠くの山の噂話を運んでくる。心配性の傘屋が、天気予報を信じて魚の餌を買いに火星へとやってくるらしい。私はそんな彼をぼっかり想像する。カラフルに輝くたくさんの傘を手に持っている。雲を千切って作った餌を、彼はたんまりと買い占める。買い物を終えて、目を細めた心配性の傘屋は、笑う様に宇宙の晴れ間を眺めて、「明日は雨かな」と呟く。空想を押し流す汽笛が遥かから響いてくる。心配性の傘屋がやってくる。私は林檎を描くのを諦めて、代わりに彼に似合うぴったりの帽子を描き始める。

ラクダ

私はフタコブラクダの背中の上に寝そべり、星がちらばった夜空を眺めている。左手を伸ばして人差し指で手近な星をつついてみる。ころころと星は転がって、月にぶつかり小さなクレーターを作る。「お客さん、駄目ですよ。こんなに綺麗な夜なのに」フタコブラクダは歩く速度を緩めずに、けれど厳しい口調でそう言う。「たくさんあるんだ。ひとつくらい構わないだろう」「それがそういう訳にも……ほら、着きましたよ、お客さん」フタコブラクダにお礼を言って、私は自分のコインロッカーの中に入って寝る準備をする。明日はヒトコブラクダにしようと心の中で誓う。

黄昏から宵へ

ほんのりと昔の匂いがした

黒い渦巻きの中に見えた景色を掴もうと
夕暮れの中を歩き疲れた蝶みたいに彷徨って
辿り着く場所は怠惰な喧騒の城

水銀色の雨が降りしきる
傘を買う親子
錆びついた看板
金網の中を泳ぐ回遊ヒトデ

あの日、愛した君は
この街の風の中に溶けてしまって
仄かに香る残滓が心地良く頬を撫でる

幻の罪滅ぼし
窓越しに光る星

ほんのりと昔の匂いがした
ほんのりと

私は外套の襟を押さえて
霞む街へと、誘われるように小さな一歩を踏み出した

名もない無人駅で
入場券を手にした老人が演説をしている
遠くに不安げに揺れる赤い花が見えた
砂利の奥に埋もれるモグラは
今夜、一本の微分方程式になった夢を見る

雲が垂れ込めて、夜が本格的に訪れる
朝を嫌う梟が空を埋めれば本当の夜の始まり
足音が奏でるリズムが
自分のものなのか判然としない

蛹になれなかった虫たちのダンスが
暗い風に乗って伝わってくる
羽音が鼓膜の端をノックする

電信柱の数を数えながら歩く
君の微笑みを捜して
私は今宵も暗闇の中をひたすら歩く

一人遊戯

ある日、折り紙で指を切った。

ぱっくりと割れた人差し指の第一関節は、ポロリと床に落ちてしまって、ひどく悲しい気持ちになる。

人差し指の空洞を覗き込むと、中は細く薄暗い。

じっと見つめて、あーだのうーだのと意味のない言葉を発していると、空洞の奥に人形がいるのが見えた。

一昨日なくした人形だわ。蒼い硝子の瞳と視線が合う。

こんなところにいたなんてね。

さっと逃げる人形を追いかけて、私は自分の指の洞の中に入っていった。

今日は鬼ごっこね。うふふふふ……。

そこで揺れる眼球

私の眼球。貴方の眼球。

取り替えっこして遊んでいたら、どちらが自分のものなのか判らなくなって。曖昧なままで良いと言って貴方は笑う。でも、私は知っている。歪んで見えていた世界が少しだけ優しく見えるから、これはきっと貴方の眼球。全てを知った様に微笑む貴方の顔。そこでころころと揺れる私の眼球が、ちょっぴり羨ましくなったんだ。

痛み

頭痛がひどい。このところ毎夜だ。

割れる程に痛い、という訳ではないが、脳に違和感がある。奥から痛みが滲むみたい。

頭痛薬の量は日に日に増えていく。

良くないとは解っている。

でも、止められない。

大量の頭痛薬を、不清潔なコップに注いだ水で流し込む。

夜の水は素敵だと思う。

私の顔を映さない。漆黒の水面。

それを一気に飲み込む。

喉の奥を、無数の粒が転がっていく。また不快になる。

薬を飲んだところで、頭痛は治まらない。寧ろ、副作用で気分さえ悪くなる。

私は毎晩、自分の飲んだ頭痛薬の数だけ左手首に傷をつける。

こうすれば、数を覚えていられるから。

自分の身体を壊してく、一つ一つの粒の数を、忘れずにいられるから。

毎日増える薬と傷に、私は自分が解らなくなってしまった。

まるで、薬と傷が、私の全ての様に思える。

それはとても安心する考え方で、とっぷりと暮れた夜に相応しい色をしている。

窓の外の木に、ひっそりと停まっていた梟が、

「今夜も頭痛と闘うのかい。貴女の手首はぼろぼろだろう」

と囁く。

月の光を反射させて遊ぶ子供の様に、私は手首を持ち上げた。

昨日までの傷痕が、笑っているかの様な無数の線を描いている。

「これは私そのもの……私のお腹の奥に溜め込んだ薬物が、そのまま傷に同化するのだもの……」

呟いてみると、言葉は案外簡単に空気を震わせて、梟は器用に片目だけ瞑って笑った。

「私には、貴女が一人の女性に見えるよ……暗がりに転がったビスクドールの様にも見えるがね」

「何を馬鹿なことを言うの？」

梟の意味不明な言葉に私はせせら笑って、高らかに叫んでやる。

「この頭の痛みと、この薬の重みと、この傷の羅列が、私自身なの！……それを、世界に向けて、私は、叫んでいるよ……！！」

無言で聴いていた梟も、やがて黒い空の彼方に飛び退ってしまった。あとには何も無い。

薄呆けた月が、のん気に夜空を支配している。

また頭痛がしてきた。

ケースから薬を出す。ばらばらと音を立てて机の上に散らばる。

今夜は何個だろうか。

何個飲めば、この頭痛から解放されるだろうか。

百個飲めば、あの梟の様に夜空へ飛んでいける気がして、私はすぐさま蛇口を捻って水をコップに溜めた。真っ黒な水で、大量の薬をごくごく流し込みながら、思う。

ああ、薬を飲み終えたら、傷をつけなくちゃ。傷をつけなくちゃ。ナイフは何処へ行ったらうか。

暗い世界でナイフを捜すのは、一種の愉しみでもある。

眠れない夜のワルツ

また今日も私の影に苛まれる
そして今日も眠れない夢を視る

夢から醒めて
夢だと識って
夢だと識って
夢から醒めた

それは酷く根本的な質問を投げかけて来る

「Who am I ?」

だから私は云って遣ったの
それが the world の全て
これが the earth の末端

凝固した夜を誰かが奪うとして
飛び出さない蝙蝠たちの列
なにくわない表情の猿の瞳
全ては脳内の微小区間
影が奏でるひとつの劇場

鳴り止まぬ声と
泣き止まぬ声は
夢から醒めても
耳障りだ

光るは銀
妖艶な輝き
刃の表面を紅く濡らすのはたいした手間ではない

考えの纏まらない頭で
差し伸べられた手を取る
ニコリと影は笑うと
私を踊りに誘った
ほら、今夜はまた眠れない

ポケットにカッターを忍ばせて

女の子はカッターを持っている。
両の手で大切そうに、大事そうに。
小さな手で狂信的に、妄信的に。
薄い水色のカッター。
カチカチカチ。
カッターの刃が伸びる。
カチカチカチカチ。
伸びる。伸びる。
女の子はカッターの刃を伸ばす。
それは女の子が不安だからだ。
怖いからだ。厭だからだ。
女の子は口では何も言わない。
嬉しい時も、悲しい時も。
楽しい時も、苦しい時も。
女の子は自分の気持ちをカッターの刃の長さで表す。
刃が出ていない時は機嫌が良い
厭なこと、不快なこと、怖いことがあると、女の子はカッターの刃を伸ばす。
カチカチカチ。
カッターの刃が伸びるたび、女の子の不安が世界に表れる。
目に見える女の子の心の中の恐怖と不安。
教室の中で独り、女の子はカッターを持っている。
周りの男子が五月蠅い。
周りの女子が煩わしい。
厭だ、と女の子は思っても口には出さない。
代わりにカッターの刃を出す。
水色のカッターが銀色に輝く舌をにゅっと出す。
震える両手でしっかりとカッターを握り、女の子は今日もカッターの刃を伸ばす。
周りの男子は女の子を怖がっている。
女の子がいつもカッターを持っているから。
周りの女子は女の子を怖がっている。
女の子がいつもカッターを持っているから。
ヒソヒソ。
ヒソヒソヒソ。
周りの子供たちの囁きが、女の子の耳をノックする。
カチカチ。
カチカチカチ。
カッターの刃は伸びる。
女の子は俯いている。
ただ、しっかりと手に力を込め、水色のカッターを握っている。
伸びる。伸びる。
ある所でカッターの刃はこれ以上伸びなくなる。
女の子の不安が最大値を示す。
怖くても、厭でも、これ以上カッターの刃は伸びない。

感情の宿らない瞳で、女の子は手の中のカッターを見つめる。

その時、教室の中でキャッチボールをしていた男子の投げたボールが、女の子の持つカッターの刃を直撃する。ペキンッ。

小気味良い音を立てて、カッターの刃は宙を舞った。

カッターの刃はとても短くなった。

それ以来、女の子は感情を表現する術をなくした。

いくら手の中のカッターを弄っても、刃は伸びていかない。

カチカチカチ。

口の中でそう呟いてみても、現実の空気を震わせない。

おまじないの様に呟いてみても、現実の世界は変わらない。

それでも。

女の子はカッターを持っている。

カッターの刃は折れてしまい、いっこうに出てくる気配はない。

女の子は途方に暮れ、それでもカッターを持ち続けている。

一方、周りの子供たちはというと。

刃がいつの間に折れたのか、気づく者はいなかった。

それでも。

女の子の持つカッターの刃がなくなっていることには気がついた。

周りの男子は女の子を怖がらなくなった。

女の子のカッターが刃を失ったから。

周りの女子は女の子を怖がらなくなった。

女の子のカッターが刃を失ったから。

ある時、腰まで伸ばした髪の女の子が、カッターを持つ女の子に声をかける。

「次、移動教室。一緒に行こう」

女の子はびくっと肩を震わせ、カッターに力を込める。

怖くて怖くて怖くて怖くて。

怖くて怖くて。

女の子は震える両手でカッターの刃を伸ばそうとする。

然し、カッターの刃は依然として伸びることはない。

髪の長い女の子は、続けて、

「ほら」

と言って白い右手を差し出す。

女の子は戸惑った。差し出された手を如何すれば良いか判らないから。

無言で手を差し伸べ続けている女の子に、カッターを持つ右手を離し、女の子は右手を同じ様に差し出し、おずおずと差し出された右手を握る。

とても暖かい。女の子はそう思った。

女の子は思い出した。カッターは冷たい。堅い。

人間の手の柔らかさと暖かさを、女の子はこの時知る。

左手に握ったままのカッターを見る。

この左手も何かを掴めるのだろうか。冷たくて堅いカッター以外のものを掴めるのだろうか、と女の子は考える。

女の子はカッターを手放す。

左手が寂しい。

繋がれた右手はぬくもりに満たされている。

女の子は閉じた世界から立ち上がる。

お守り代わりにカッターを上着のポケットにしまう。

今まで生活を共にしてきたパートナーに、心の中でお礼をする。

今はまだ空っぽの左手だけど、いつか何かを掴めるだろうか、と女の子は不安混じりに期待を込める。

女の子はきっといつか明るい未来を掴む。

空いた左手で、明るい自分の未来を。

きっと。きっと。

女の子は自分の未来の希望を願っている。

これからも、願っていく。

ポケットにカッターを忍ばせて。

今、女の子の空っぽの左手は、未来を掴むために忙しい。

メロディ

死体 見たい 観たい 視たい

遺体 痛い 痛い 痛い

死体 硬い 暗い 冷たい

怖い 恐い 以来 来ない

肢体 死体 殺 したい

死体 肢体 愛 したい

奇態 奇怪 嫌い 嫌い

嫌い 儂い 暗い 世界

期待 淡い 未来 はない

赤い 紅い 朱い 赫い

世界 赤い 得体 知れない

死体 遺体 痛い 死にたい

死体 死体 痛い 逢いたい

死にたい 知りたい 死に合い 愛したい

いない いない

いない いない ばあ